

空中写真6.3 岩手・宮城内陸地震2年前の荒砥沢地すべり周辺の空中写真 (国土地理院撮影：TO-2006-2X, C4, 6-8, モノクローム, 縮尺1/20,000)

- 37) まず、災害31年前の空中写真6.2を判読します。この付近には大雑把に見ると扇型の平面形をした、地すべり地形が認められます。これは、1982年に発行した最初の地すべり地形分布図第1集の「栗駒山」図幅（縮尺1/50,000）に示されています。しかし、よく見ると、3つの地すべり地形からなっていることがわかります。一つの地すべり地形にくるくるとは無理がありました。また、東隣にも、もう一つ地すべり地形があります。四葉のクローバーのように合計4箇所が放射状に並んでいます。これらを、図6.7に示すように東の地すべり地形から順に古荒砥沢E地すべり、古荒砥沢C地すべり、古荒砥沢W地すべり、古荒砥沢S地すべりと呼ぶことにします。

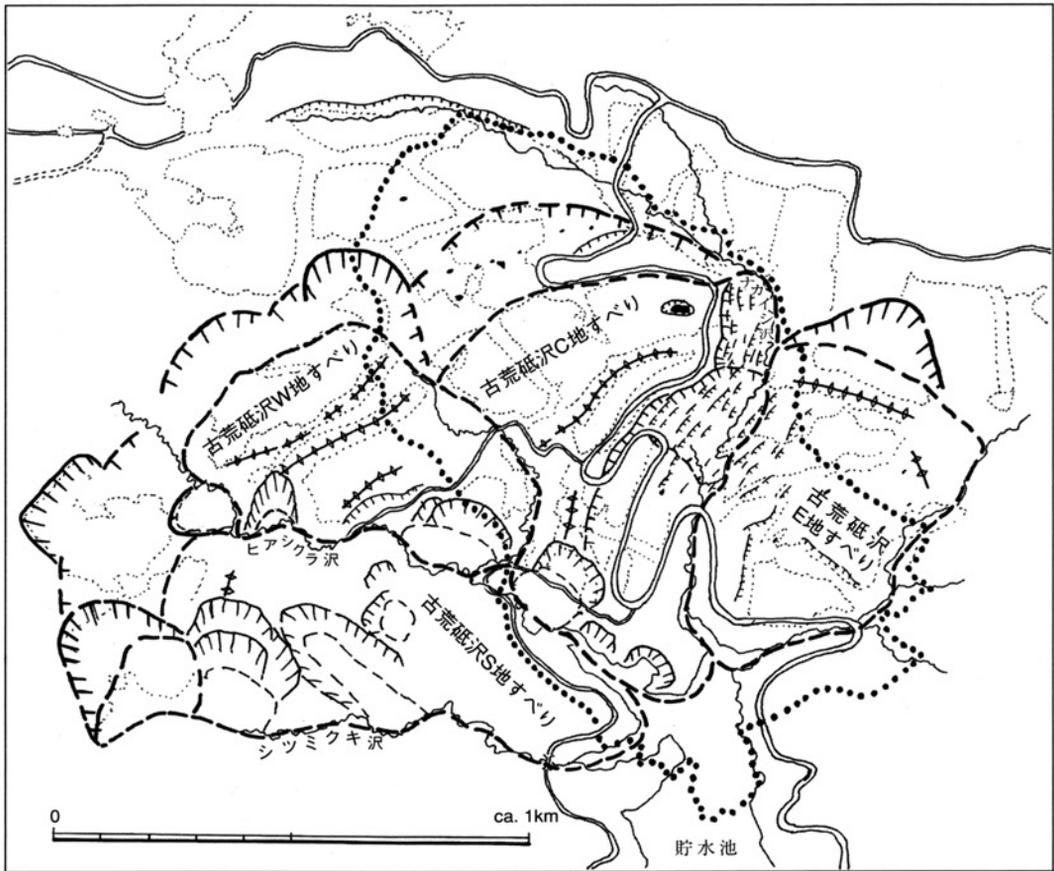


図6.7 古荒砥沢地すべり群の分布

古荒砥沢地すべりは、それぞれ発生時期がそれぞれ異なる4個の地すべりの集合といえる。点線は2008年に発生した荒砥沢地すべりの輪郭を現している。

- 38) これら4箇所地すべり地形の滑落崖に注目すると、それぞれ崖のシャープさが異なります。滑落崖は一般的には、新しいほどシャープな崖となっています。時間が経つと、崖の肩部が崩れ、従順化して滑らかな斜面になったり、谷が入ったりします。最も滑らかになっているのは古荒砥沢C地すべりです。

一方、最もシャープな滑落崖を持つのは古荒砥沢W地すべりです。古荒砥沢E地すべりも古荒砥沢W地すべりと同程度に見えます。また、古荒砥沢S地すべりは古荒砥